

大規模増殖場造成事業調査

(白糠地区 エゾアワビ)

(要 約)

松坂 洋・植村 康・金田一拓志・宝多 森夫

※1

※2

東通村白糠地区ではアワビはウニ、コンブとともに重要な磯根資源の一つである。そこで低利用漁場にアワビを育成するためのブロックを設置して増殖場を造成し、人工種苗を放流することによってアワビ資源の増大を図ることを目的としている。

本事業は昭和58年から昭和61年の4ケ年計画で実施し、それと並行して効果調査を行なったので、その結果を報告する。

なお、調査を実施するにあたり、協力をいただいた白糠漁業協同組合に感謝の意を表する。

1. 施設の現況

昭和61年10月から11月にかけて潜水により施設の状況を調査した結果、設置した4種類のブロック(MM型、M型、コンベックス、アパロンII型)のうち、MM型ブロックで砂域に設置されたものの1部が若干埋没しているのが観察された。しかし、それ以外ではブロックの埋没、移動、破損はみられず、状況には問題がなかった。

2. 増殖対象生物の状況

(1) 餌料海藻調査結果

白糠A工区において主に着生した海藻類は、コンブ、ワカメ、チガイソ、クシベニヒバ、アカバであった。ブロックのコンブの着生量はブロック周辺よりも多く、事前調査(56年8月)から算出されたブロックの海藻着生可能量は1㎡当り7,255gであるが、4ケ年の調査での平均値は5,799gでやや下廻った。しかし、事前調査を行なった8月と同時期のコンブの着生量は1㎡当り10,123gで可能量を上廻っていることから、餌料環境は良好であると思われる。

(2) エゾアワビ調査結果

a. A工区でのエゾアワビの生息状況

枠取り調査の結果では、造成漁場内ではブロックに多くエゾアワビが分布する傾向がみられた。また、放流貝の割合は、MM型ブロックで80.1%、M型ブロックで76.5%で放流貝の占める割合が高かった。M型ブロックは59年、MM型ブロックでは60年に稚貝が放流されており、再捕した放流貝の平均殻長はM型ブロックで76.7±8.5mm、MM型ブロックで54.0±6.9mmであった。平均殻長および放流時の殻長からM型ブロックでの放流貝は59年放流群、MM型ブ

※1 現 栽培漁業公社

※2 漁業振興課

ックの放流貝は60年放流群と考えられ、餌料環境が良好であるために、放流地点付近に滞っているものと思われる。

このように放流貝の割合が高い原因の一つとして、昭和59年春先におこった異常低水温により、90mmを超える天然貝が大量に岸に打ち上げられ、天然貝が減少したことによって放流貝の割合が高まったことが考えられる。

b. 放流貝の成長

昭和59年6月放流群の成長を見ると、放流後857日で平均殻長が76.7mmに成長し、その増殻長は、53.5mmに達している。年間の成長に換算すると22.8mmであった。

白糠地区でのエゾアワビの年令と殻長の関係から、この放流群の再捕時までの殻長を算出すると、64.4mmとなり、天然貝よりもよい成長を示していた。

参 考 文 献

- 小田切明久他（1981）：大規模増殖場開発事業調査総合報告書（三八地区），青水増資料，
S 56 -Ⅱ 9
- 三木 文興他（1981）：大規模増殖場開発事業調査総合報告書（風間浦地区），青水増資料，
S 56 -Ⅱ 10
- 小田切明久他（1983）：大規模増殖場造成事業調査報告書（白糠地区 エゾアワビ），青森県